

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

① いま、みなさんには「大人たちに見えないもの」が見えています。

目を凝らしてください。世界を眺め、大人たちを眺め、自分の心を眺めてください。大切なものが見えてくるはずです。

たとえば朝、パジャマを脱いで②「セイフク」に着替えながら「どうして男子はズボンをはいて、女子はスカートをはくんだろう？」と考える。国語の授業中に「どうして国語の教科書は縦書きで、ほかの教科書は横書きなんだろう？」と考える。あるいは夜、ベッドに入ってからなんとなく「人はなんのために生まれてくるんだろう？」と考える。

身近な疑問から人生そのものを問うような疑問まで、小さきままな「なんで？」「どうして？」を考える機会があるでしょう。じつは、大人になっていくと、こうした疑問を感じにくくなります。

仕事に忙しくて、余計なことを考える時間がない。仕事に直接関係しないような疑問は「余計なこと」として切り捨ててしまう。さらには、もう何十年も「男子はズボン、女子はスカート」「国語の教科書は縦書き」といった常識に染まって生きてきたせいで、それをおかしいと思うことができない。

たしかな答えを知っているわけでもないのに、疑問を感じることができなくなる。なんとなく「わかったつもり」になっている。一方、若いみなさんは、まだ大人の常識に染まりきっていません。

公園で知らない草花を見つけたとき、テレビのニュースでなにかの事件に触れたとき、コンビニで買いものをするとき、道路の交通標識を見たとき。日常生活のなかで、さまざまな違和感を抱くことがあるはずです。「これってなんだ？」と不思議に思ったり、「なんかおかしくない？」と疑問を感じたりすることがあるはずです。

この「小さな違和感」を大切にしてください。

違和感をスルーせず、自分のなかで大切に育ててください。

なぜなら、その小さな違和感こそが、未来につながる冒険の扉なのです。

注1 ベーコンは「知は力なり」と③ダンゲンしました。

④そしてほんとうの「知」は、「疑うこと」からはじまります。

世のなかにあふれる常識、権威、けんい権威、限界、慣習など、さまざまな「あたりまえ」に疑いの目を向けること。大人たちがスルーしている疑問を、自分の頭で考えること。それが「知」の第一歩なのです。

もしかするとみなさんは、先生やご両親から「人を疑うのはよくない」と教えられてきたかもしれません。

でも、こう考えてください。

友だちや先生、ご両親など、まわりにいる「人」を疑う必要はない。

けれども、その人たちの語る「コト」については、疑いの目を向けたほうがいい。なんでも鵜呑みにせず、自分の頭で考える癖をつけたほうがいい。

いいですか、「人」を疑うのではなく、「コト」を疑うのです。この「人とコト」を切り離して考える習慣をつけておきましょう。

それではなぜ、疑う力が大切なのか。

みなさんのご両親が中高生だったころ、また、おじいちゃんやおばあちゃんが若かったころ、疑う力は、それほど重要視されていませんでした。むしろ当時は、「なんの疑いももたず、与えられた課題をガンガンこなす人」が求められていました。数学の問題集をたくさん解いていくような、
⑤「」の力です。

でも、今ではコンピュータやロボットを使えば、人間よりもずっと速く、たくさんの課題をこなしてくれます。コンピュータやロボットには、お給料を払う必要さえありません。こうして昔ながらの⑤「」の仕事を、もはや私たちはしなくてもよくなっているのです。

それでは現在、みなさんにはどんな力が求められているのか？

答えはひとつ。「課題発見」の力です。

課題発見の意味について、わかりやすい⑥ジレイを紹介しましょう。

20世紀の初頭に「自動車王」として一時代を築き、世界初の量産型大衆車を製造したアメリカの⑦ジツギョウカ、ヘンリー・フォードはこんな言葉を残しています。

「もしも人々になにがほしいか尋ねたなら、彼らは『もっと速い馬がほしい』と答えていただろう」

自動車が普及する前の時代、人々の乗り物はもっぱら馬車でした。

⑧遠くに移動したい、もつと速く移動したい、と思ったとき、ほとんどの人々は「もつと速く走れる馬を手に入れよう」と考えました。「馬車」という常識に縛られ、それ以外の乗り物のことなんて、想像することさえできなかったのです。

しかし、フォードの発想は違います。

馬よりも速く、馬よりも疲れを知らない、もつと便利な「なにか」があるはずだ。

そう考えたフォードは、人間は馬車で移動するものだ、という当時の「あたりまえ」を疑い、まったく別の道を探っていきました。

そうしてたどり着いた答えが、ヨーロッパで発明されたばかりの自動車だったのです。

当時の自動車は、まだまだ数が少なく、一部の貴族やお金持ちにしか買えない「超ぜいたく品」でした。現在でいうなら、家用ヘリコプターや家用ジェット機のような感覚です。自動車が馬車の代わりになるなんて、誰も想像していませんでした。

⑨フォードは、この「超ぜいたく品」である自動車を、どうすれば安く製造できるか考えました。あたりまえの話ですが、自動車にはエンジンがあります。これは複雑で、つくるのにかなりのお金がかかる⑩ソウ升です。そしてその他の部品も、馬車とは比較にならないほど多くなります。このあたりのお金を削るわけにはいきません。

それではどこを削るのか？ フォードが目をつけたのは、「時間」でした。

ひとつの部品をつくるのに1時間かかっていたところを、5分でつくるようにすればいい。そうすれば1時間で12個の部品ができる。1時間分のお給料で、12倍の仕事をしてくれるようになる。

そこでフォードは、のちに「フォード・システム」と呼ばれる、ベルトコンベアを使った流れ作業による大量生産システムを開発します。よく火災訓練のときにおこなうバケツリレーのように、流れ作業で自動車を組み立てれば大量生産できることに気づいたのです。こうして自動車の価格は大幅おおはばに引き下げられ、馬車の代わりとなる自家用車が爆発的に普及していったのです。

さて、そうやって考えると、いまの日本はたくさんの「^⑪馬車」があふれていることに気がつくでしょう。ほんとうは^{注2}抜本的な変化が必要なのに、みんなこれまでの延長線上にある「もつと速い馬」のことしか考えていない。「^⑤」にしか、頭が回っていない。馬車を捨てて自動車に切り換かえるような発想ができない。

みんなが「^⑤」ばかり考えてしまうのは、疑う力が足りないから。世間で常識とされていることを疑い、「課題発見」のできる人になりましょう。

『ミライの授業』 瀧本哲史 たきもとてつふみ

注1 ベーコン・・・イギリスの政治家、哲学者。てつがく（二五六―一六二六）

注2 抜本的・・・物事の根本から改めること。

問1 ―部①「いま、みなさんには『大人たちに見えないもの』が見えています」とありますが、『大人たちに見えないもの』

が見えて」いるとはどういうことですか。それを説明した次の文の□部A～Dに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出さない。（句読点は字数に入れます。）

大人には□A（十一字）がなく、□B（二字）に染まってしまったことによって□C（二字）を感じにくくなるが、子どもは日常生活のなかでさまざまな□D（二字）を抱き、□C（二字）を感じるということ。

問2 ―部②・③・⑥・⑦・⑩のカタカナを漢字に直さない。

問三 ――部④「そしてほんとうの『知』は、『疑うこと』からはじまります」とありますが、筆者の考える「疑うこと」とはどう
 することですか。三十五字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問四 部⑤とありますが、

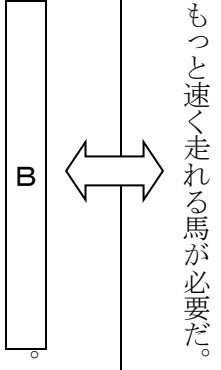
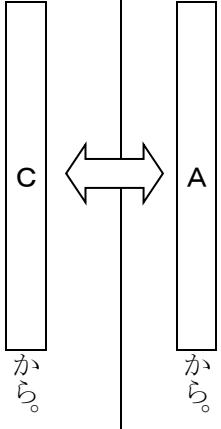
(1) 空らんにあてはまる言葉を次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 課題理解 イ 課題解説 ウ 課題研究 エ 課題解決 オ 課題調査

(2) ――部が求められなくなったのはなぜですか。文中の言葉を使って六十五字以内で書きなさい。

（句読点は字数に入れます。）

問五 ――部⑧「遠くに移動したい、もっと速く移動したい、と思った」とありますが、多くの人々とフォードはそれぞれどう考
 えましたか。両者の考え方の違いを比較した次の図の 部A～Cに当てはまる言葉を、文中の言葉を使って書きなさい。

フォード	多くの人々	
		どう考えたか なぜそう考えたか

問六 ―― 部⑨「フォードは、この『超ぜいたく品』である自動車を、どうすれば安く製造できるか考えました」とありますが、

フォードはどのような方法を考えましたか。その方法がわかる一文を文中からぬき出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

(句読点は字数に入れます。)

問七 ―― 部⑪「馬車」は何の比ゆだと考えられますか。その答えとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 想像 イ 課題 ウ 常識 エ 疑問 オ 発明

問八 本文の内容に合うものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大人は仕事が忙しく時間に余裕よゆうがないため、子どもが世間での「あたりまえ」を疑いそれを大人に示すことで、自分たちの間違いに初めて気づくことができる。

イ ほんとうの「知」は疑うことからはいじまるので、さまざまな常識に疑いの目を向け、なんでも鵜呑みうのにせず自分の頭で考える習慣をつけることが大切である。

ウ コンピュータやロボットの技術が発展し、今まで人間がしていた仕事を代わりにするようになったため、これから人間が持つ能力は衰えていくと予想される。

エ ヘンリー・フォードは当時乗り物で主流だった馬車を時代遅れとし、新しく発明された自動車を貴族社会に広めた功績があり、常識に染まらない人物であったと言える。

オ 常識にとらわれ、変化を嫌う風潮きざうがある今の日本にとって、疑う力を持ち「課題発見」のできる人を増やすことが、これからの未来の世界で勝ち残るための道である。

問九 筆者はこの文章で、「課題発見」の力の大切さについて述べています。今のあなたの周囲にはどのような課題がありますか。その課題の中から重要だと思うものを一つ挙げ、それを選んだ理由を百字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈十二歳さいの少女アミリアは、幼いころに母を亡なくし、いつもゆううつそうな大学教授の父親と暮らしている。この家の事を引き受けているのはおむかいの家に住む女性オブライエンさんである。お父さんと同じ大学に勤めるハナは、お父さんのガールフレンドで、今夜初めてこの家の夕食に招かれた。〉

アミリアはデザートのカッキーを手に、①トクイげにダイニングルームにもどっていった。われながら芸術的なできばえだ。

みんな、ケーキによるこんだ。

みんな、いいできばえだと言ってくれた。

みんな、二切れ目に手をのばした。

「ほんとうにすばらしいわ、二人とも。なんてきれいなかしら、ほら」

ハナはそう言って、切りつけたケーキについている黄色い花にフォークの先をむけた。

オブライエンさんが答えた。

「かざりつけはアミリアなの。どこに花をつけたらいいか、ちゃんとわかってたわ。センスがいいのよ、才能ね」

「この子は芸術家なんだ。ほんものの芸術家だ」

お父さんはそう言って、うれしそうに小さくほほえんだ。

アミリアの胸のおくを、なにかがシュツと音をたてて走りぬけた。いい気持ちだった。こんなふうに言われたのははじめてだ。

まさかお父さんが、ケーキのかざりつけの話をするなんて！

「あなたが作った動物もすてきよ」

ハナはそう言うと、食器棚しよつたなにならんでいるアミリアの作品にむかって、小さく頭をふった。

「お父さんから聞いたわ。もう長いこと陶芸とうげいをやってるんですって？」

「ええ、ほんとうに小さいころから」オブライエンさんが言った。

「絵は描かかないの？」ハナがきいた。

「スケッチはまあまあ好きです。色をぬるのも。でも、陶芸がいちばん好き」アミーリアは答えた。

「そう、とつても上手なものね」ハナが言った。

こんなことつてあるんだろうか。うれしすぎて、ほんとうとは思えない。こうして夕食のテーブルをかこんでいるのは、とつぴな空想なんかじゃない。現実なんだ。

アミーリアは小川に浮うかぶ小枝のように、しあわせな気分になされ、気がつくと、陶芸工房こうぼうで②コテンをひらけるかもしれないという話をしていた。

「おもてのショーウィンドウをそっくり使わせてもらえるの。わたし一人で」

③コウフンで声が上ずっていた。ウサギを、それも、たくさん作っていることをしゃべった。

「もうずいぶん作りました。みんなおなじようにうわぐすりをかけるつもりです。見わけがつかないように」
だんだん早口になっていく。

「陶芸工房のルイズが言っていました、なにかがたくさんあることは美しい、って」

アミーリアはいすの背にもたれ、ひと息ついた。

「そうは思わないね」お父さんが言った。

「え？」アミーリアは、意味がよくわからなかった。

「そうは思わないね」お父さんはくりかえした。「なにかがたくさんあるからといって、美しいとはかぎらない」

④みんな、しばらく、じっとおしだまっていた。

アミーリアは顔をしかめた。

「無意味なものがたくさんあったらどうかね？　悲しみがたくさんなら？　わたしには、それほど美しいとは思えないな」お父さんは続けた。

胸の鼓動が早くなった。さつきまでのしあわせが糸のように細くなっていく。どうしたらいいか、なにを言ったらいいかわからない。激しい怒りが胸の中でもつれ、泣いてしまいうになる。アミーリアは、いきなりテーブルに手をつけて立ちあがった。

「お父さんの頭には、その二つしかないんですよ。無意味だ、悲しい、なんでもそう考えるんだもの！」アミーリアは、そう言いすててダイニングを出ていった。

「アミーリア、もどきなさい」

お父さんの声が追いかけてくる。

「おまえを傷つけるつもりはなかったんだ。悪かったよ」

アミーリアは部屋にもどり、ドアをしめた。

「いいかげんにしてよ、お父さん」

だれにともなく、つぶやいてみる。

「おかげで、わたしの人生、めっちゃめっちゃだよ」

アミーリアがベッドにねそべり、声をたてないように泣いていると、廊下から声が聞こえてきた。⑤の声。

アミーリアは体を起こし、耳をそばだてた。なにを話しているかまではわからない。とぎれとぎれに声が聞こえてくるだけだ。

まず、⑥の声が聞こえなくなり、部屋の前からいなくなったとわかった。少しして、⑦とハナの声も……。しんとしている。でも、だれかの⑧ケハイが残っていた。

すると、ドアをそっとノックする音がした。

「どうぞ」

アミーリアの声は弱々しく、かすれていた。

オブライエンさんかと思ったら、ハナがゆつくりと部屋に入ってきたので、アミーリアはおどろき、^⑨きまり悪くなって顔をかくした。

「いいかしら？」

ハナが、ベッドを指さして言った。

アミーリアはうなずいた。目が涙でうるんでくる。^{なみだ}

ハナは、アミーリアの横にすわった。どちらもしばらくだまっていたが、ようやく、ハナが口をひらいた。

「だいじょうぶ？」

アミーリアは、またうなずいた。

「この部屋に入らせてもらうのに、二人を説得しなきゃならなかったわ。お父さんもオブライエンさんも、あなたがいやがるんじゃないか、って心配してた。でも、^⑩どうしても話がしたくて」

ハナは、少しずつアミーリアに近づいた。

「お父さんは、ほんとうにあなたを大切にしているわ。それから、こんなこと言われなくてもわかつてると思うけど、あの人、気持ちをおもてに出したり、正面から物事にむきあったりするのが苦手でしょう？」

ハナの腕がアミーリアの肩にふれたが、やわらかな感触がびつくりするくらい心地よかった。^{うで}^{かた}^{かんしよく}^{こころ}

「知っておいてほしいことがあるの」ハナは言った。

「お父さんは心配してるのよ、とつても。わたしとおつきあいすることで、あなたが傷つくんじゃないかって。お父さんはあなたにこの話を切りだせず、認めてくれるかどうかとかないから、こうなったらわたしからきこう、って思ったの。だって、この話が前に進んでほしかったから。だからこのあいだ、思いたって陶芸工房の近くを歩いてみたわ。そのあとにも、もう一度。あの近くで偶然会えたらいいなと思って」

ハナは、ひざの上でピアノを弾くように指を動かすと、につこり笑って眉を上げた。

「会えなかったけど」

そう言っ指を止め、手を組んだ。

「うーん、^⑪ほんとうはちよつとちがうわ。正直に言わなきゃね。わたし、たぶん、あなたを見かけてるわ。リージェント・ストリートにある小さなカフェにいるところを。でも、おじけづいてしまったの。あなたをこまらせたくなかったし。それに、なにを言えばいいかわからないことに気づいて……。こわかったのね、きっと」

「こわかった？」

「そう。おかしいでしょ。大人だって、こわくなることがあるの」

アミーリアは、はつと息をのみそうになるのをこらえ、「そうなんだ」とかろうじて言った。^⑫いろいろなことが頭の中で音をたててかみあい、つじつまが合っていく。

「ストーカーになった気分だった。ほめられたことじゃないわね」

うしろでまとめてあったハナの髪がゆるみ、赤茶色の巻き毛が顔のまわりにかかっていた。ハナはその巻き毛のひとつさを、くるくると指にからめた。

「お父さんが、あなたの写真を見せてくれたことがあるの。それから、どこへ行っても、今のはあなただったんじゃないかしら、って思った。わたし、お父さんのことが好きだから。だから、あなたをさがして話をしてみよう、って」

そう言くと、ハナは目にかかっていた髪をかきあげ、耳にかけた。

「でも、そういうやり方はよくないって気づいたの。だから、できなかった。お父さんのいないところで、あなたに話しかけるなんて」

アミーリアは、まるで命がかかっているみたいしんけんな真剣な目でハナを見つめ、ひとこと、ひとことに耳をかたむけていた。ハナはむきなおり、まっすぐにアミーリアを見た。

「こんな話をしたのは、今夜はお父さんにとって、ほんとうに大変だったってことを言いたかったから。お父さんは、すべてがうまくはこぶように願ってた。あなたがわたしを気にするように。わたしがあなたを気にするように。それにコテンのことも悪気があってあんなふうに言ったわけじゃないのよ。」^⑮ じまん「あなたはお父さんの自慢のむすめなんですよ」

どう答えたらいいか、アミリーアには言葉が見つからなかった。そして、くずれるようにハナにもたれかかったとたん、胸の中でも、なにかがくずれた。また涙が出てきたけれど、なぜと言われても、はっきりこれが理由だとは説明できなかっただろう。すべてを、そして、みんなのことを思っただけ泣いた。お母さん、お父さん、オブライエンさん、ハナ、友達。そして、自分のことを。ハナが、少し体をはなして言った。

「知ってる？ あなたが小さいころ、お父さんは、あなたをねかしつけるために毎晩抱っこして歩いてたこと。あなたが起きてるうちは、ベビーベッドにおろせなかったんですって。すぐに泣いてしまうから。」

それで絵はがきをもたせてみたら、どうやら気に入ったらしいの。『さうのバール』の絵はがきよ。そうして、あなたはお気に入りの絵はがきをにぎりしめ、お父さんはあなたを肩に抱きあげて、縦に、横に、^⑯ ユラしながら家中を歩きまわったんですって。

あなたが絵はがきを落とすと、ああ、ねたな、とわかって、やっとベビーベッドにおろせたそうよ」

「お母さんはどこにいたんだろう？」

「もう具合が悪かったんだと思う」

「お父さん、^⑰ そんな話、一度もしてくれなかった」

「^⑱ あの人らしいわね」

「^⑲ でも、あなたには話したんですよ」

「それは、わたしがお父さんの研究室で、本やファイルが山になってるおくに、その絵はがきはさまってるのを見つけたから。あの人が手もとにおいておくものにしては変わってるなと思って、それできいてみたの」

ならんですわっているうちに、二人のあいだになにかが通いあった。このころにはもう、ハナの髪はすっかりほどけていた。ハ

ナは、なれた手つきですばやく髪をたばね、くるりとねじりあげてまたものおだんごにした。

「それ、わたしにもやってくれる？」アミーリアがきいた。

ハナはなにも言わずにポケットに手を入れ、小さな青い玉のついたヘアゴムをとりだしてアミーリアに見せた。そしてベッドの上ですわりなおすと、アミーリアの髪の毛をていねいにたばね、おだんごにまとめた。きつすぎず、ゆるすぎず。^⑮ちよūdいいに感じに。

『春のウサギ』ケヴィン・ヘンクス

訳 原田勝・大澤聡子
はらだまさる おおさわあきこ

問一 — 部①・②・③・⑧・⑭のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部④「みんな、しばらく、じっとおしだまっていた。」とありますが、どのように考えたからですか。最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもあまり話さないお父さんが話し始めたのでおどろき、ちゃんと話を聞かなくてはと考えたから。

イ お父さんの言うとおり、たしかにたくさんあっても美しくはないものもあるのだと考えはじめたから。

ウ しあわせそうなアミーリアの様子に水をさすような言葉を聞いて、何と言ったらよいかわからなかったから。

エ アミーリアが楽しみにしているのに、ウサギをたくさん作ることができなくなるのはかわいそうだと思ったから。

オ アミーリアの作るウサギと、悲しみとがどう関係があるのかわからず、次の言葉が出てこなかったから。

問三

部⑤く⑦に当てはまる言葉を、次のア～キのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(同じ記号は二度使ってははいけません。)

ア お父さん、オブライエンさん、そしてハナ

イ お父さんとオブライエンさん

ウ お父さんとハナ

エ オブライエンさんとハナ

オ お父さん

カ オブライエンさん

キ ハナ

問四

部⑨「きまり悪くなって」とありますが、「きまり悪い」の文中での意味を答えなさい。

問五

部⑩「どうしても話がしたくて」とありますが、ハナはアミーリアにどのようなことを伝えたかったですか。六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問六

部⑪「ほんとうはちょっとちがうわ」とありますが、ハナは、ほんとうとどこを変えて話をしたのですか。書きなさい。

問七

部⑫「いろいろなこと」とありますが、ここでアミーリアはどのようなことを考えたのですか。その中の一つを説明した次の文の部A～Cに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。

(句読点は字数に入れます。)

お父さんがあんな言い方をしたのは、わざとアミーリアを部A(七字) だったのではなく、もしかしたら、今夜の夕食の

みんなが楽しそうにしているふんいきや、アミーリアの部B(四字) そうなようすを見て、逆に、悲しいことが起きたらと

考えて部C(五字) のかもしれないと思った。

問八 — 部⑬「あなたはお父さんの自慢のむすめなんですもの」とありますが、「自慢のむすめ」であることがわかるお父さんの言葉をぬき出しなさい。

問九 — 部⑮「そんな話」とありますが、どのような話ですか。最も適当なものを次のア、オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア お父さんは、毎晩、小さかったアミーリアに「ぞうのババール」の絵はがきを持たせて、抱っこしてねむるまで歩き回っていたこと。

イ お父さんは、アミーリアが小さいころ、なかなかねないアミーリアをねかしつけるために、毎晩あれこれと方法を試していたこと。

ウ お父さんは、アミーリアが小さいころ氣にいつていた、「ぞうのババール」の絵はがきを今でもずっと大切にしていた、仕事場にまで持っていていること。

エ アミーリアが小さいころ、ずっと具合が悪かったお母さんは、アミーリアの面倒をみることができず、お父さんにまかせきりにしていたこと。

オ アミーリアが小さいころ、お母さんは亡くなる少し前から具合が悪く、アミーリアを抱っこして歩き回り、ねかしつけることができなかったこと。

問十 — 部⑯「あの人らしいわね」とありますが、お父さんがどのような人なのか語られている部分を、三十二字でぬき出しなさい。（句読点は字数に入れます。）

問十一 — 部⑰「でも、あなたには話したんでしょ」とありますが、お父さんがハナにその話をした理由について、「アミーリア」と「ハナ」自身は、それぞれどのように考えていますか。説明しなさい。

問十二 — 部⑱「ちょうどいい感じに」とありますが、この表現から、アミーリアがハナに対してどのように思っていることが伝わりますか。それがわかる文中の他の部分にもふれ、アミーリアがどのように感じているか、説明しなさい。